

Cortot)、ヴァイオリンがティボー (Jacques Thiboud)、チェロがカザルス (Pablo Casals) というメンバーで、フランスで結成された三重奏団だったが、「大公トリオ」などベートーベンやハイドンなどドイツの曲が得意であった。ティボーはフランス、コルトーはスイス、そしてカザルスはスペインという出身の異なる三人は、パリで知り合って1905年に三重奏団を結成し、その活動は1933年まで続いた。実は、その連想があったので、このベラ、ムジカが派遣された三重奏団にも、私は「大公トリオ」のような曲を無意識のうちに期待した。

ピアノ三重奏や弦楽四重奏などの室内楽はもともと宮廷の室内に由来したが、18世紀以来庶民も聴くようになった。ピアノ三重奏は室内楽の最重要な形態の一つで、演奏者が一体となってハーモニーを醸し出す弦楽四重奏などとは次の点で異なるといわれる。すなわち、演奏者の個性を発揮しながら演奏技術の華麗さを発揮し、しかもアンサンブルの完璧さが要求される。コルトーの洗練と華麗、ティボーのしなやかさとあか抜けしたフランス風、カザルスの気宇の壮大さと深遠な音楽性が渾然とし、比類のない幅広い表現力と音楽美を創り出したカザルストリオの演奏はまさにピアノ三重奏の最高峰といえた。

さて、ベラ・ムジカの演奏であるが、難をいえばピアノが勝ちすぎ、弦がやや貧弱に聞こえた。ひとり響き、歌うピアノに弦が必死でついて行くという風情で、何とはない不安感を持ちながら聴いていた。ピアノ奏者は寮歌の編曲もした音楽大学の講師であり、弦の演奏者である二人の若い女性は専攻科の学生であるから、ベートーベンを聴くような期待をするのは酷というもので、ピアニストが若い弦をリードしようと頑張ったのであろう。技術はともかくとして、一生懸命に演奏する彼女らの奮闘ぶりには好感が持てた。聴いていると、ヴァイオリンの音色の美しさが時たま顔をのぞかしていたので、彼女の音楽的才能はかなり高いように私は感じた。そこで演奏後きいてみると、彼女の楽器は弦楽器の本場イタリアのクレモナで求めた由、彼女は研鑽を積みばきっと名手になるであろう。また、熱演したチェリストの女性にも声援をおくろう。編曲をしたというピアニストは既に立派な専門家であるが、学生の彼女らの将来はこれからである。経験を積み、腕を磨き、やがて彼らが関西のベラ・ムジカトリオの名をあげる日がくるよう期待しよう。カザルスも無名時代はオペレッタ劇場の演奏者として生計を立て、ティボーはカルチェラタンのレストランで楽手をしていた。司会をした紺田君の「寮歌をきいたことがあるか」という問いに一人の女性奏者は「ある」と答えた。おそらく旅順高校の「北帰行」や三高の「琵琶湖周航の歌」などを聞いたのであろう。やがて彼女らも寮歌の心を理解し、素晴らしい演奏を聴かせてくれるであろう。次回に寮歌の他、ベートーベンやシューベルトを演奏してもらったら、この三重奏団はさらに能力を発揮するのではないか。

蛇足ながら、物部氏作曲の「松高賛歌」の重厚さ、池部氏編曲の叙情性に対し、今回のピアノ三重奏曲の「寮歌」はシューベルト風の洒落た曲につくりあげられ、ピアニストの才能を窺わせた。来年の総会が楽しみである。(松山高等学校同窓会京阪神支部会報、平成9年度)

「京阪神支部平成9年度総会におけるミニコンサート」

昨年の総会に引き続き、今年も総会後の懇親会に先立ちミニコンサートが開かれることを案内から知った。当日のプログラムは「独逸歌曲ミニコンサート」とあり、シューベルトの歌曲

など4曲が演奏されるとあった。いずれも松高生には馴染みのある歌曲で、ベルナ（Hans Börner）先生のドイツ語の時間に歌ったシューベルトの「菩提樹（Der Lindenbaum）」、「野薔薇（Heidenröslein）」、「セレナーデ（Ständchen）」、それにハイネの詩（ジルヒャー、F. Silcher作曲）による「ローレライ（Lorelei）」であった。

中谷正史氏の大和の酒蔵に関する講演、記念写真撮影ののち、いよいよミニコンサートが始まった。出席者は皆ベルナー先生のクラスを懐かしく思い出し、はじめに世話役の紺田功幹事が、「皆さんどうぞ一緒に歌わないで下さい」と念を押すほど一同の期待感が高まった。昨年のピアノ三重奏を紺田幹事の依頼でお世話頂いたベラ・ムジカの春日妙子さんのピアノ伴奏で、相愛大学講師の若い萬田一樹君が歌った。懐かしい歌とピアノが会場全体に響きわたり、多くの出席者は萬田君の歌声に合わせてそっとドイツ語の歌詞を口ずさんでいた。この原稿を前もって依頼されていた私はただ感激に浸るわけにゆかず、歌とピアノに耳を傾けた。どうもしっくり来ない。あとで宴席のとき萬田君と隣合わせになったのでいろいろ話しをしたところ、彼のドイツ語は目下ゲーテ協会で勉強中とのことであった。また、リートは彼の本来の専門でなく、その上、春日女史とは総会当日、ミニコンサート直前に初めて合わせたとのことであった。そのためか彼の歌ったシューベルトは、はっきり言って音楽的には決して上々とは言いがたいものであった。しかし、曲目がすばらしく良かった。出席者一同松高時代に帰ってただただ感激、拍手は鳴り止まず、ミニコンサートは大成功であった。

私は少年時代からシューベルトが好きで、未完成交響曲や室内楽などのほかドイツ語を解する前から「冬の旅」、「美しき水車小屋の乙女」などをレコードでよく聴いていた。シューベルトの歌曲といえば、当時の第一人物は何と言ってもヒッシュ（Gerhard Hüsch）であった。その派手さはないが完璧な技巧と、劇的な誇張など微塵もないリートは端正で非の打ちどころがなかった。おそらくミュラーやゲーテの詩とシューベルトの音楽の理想的な理解と解釈の裏付けが完全だったのであろう。現在でもヒッシュに匹敵するドイツリート歌手はいないのでないかと私は思う。当時、「冬の旅」はSPレコードで10枚近いアルバムだったように記憶する。実は今、私はその復刻版LPでヒッシュを聴きながら本稿を書いている。ヒッシュのあとホッター（Hans Hotter）が出たが、彼はヒッシュとくらべるとやや派手な歌い方であったように思う。現在、ドイツ歌曲の第一人者はおそらくディートリッヒ・フィッシャーディースカウ（Dietrich Fischer-Dieskau）であろうか。フィッシャーディースカウはヒッシュと比べてもすばらしく声がいい。荘厳さにおいてはヒッシュに及ばないが、フィッシャーディースカウは巾と奥行きのある、心に染みる実に美しい声をもっている。彼は、詩と音楽の心を十分に理解しなくてはリートは歌えないと、NHK教育テレビの指導番組で述べていたのを聞いたことがある。女性のリート歌手にも精神的な奥深さを感じさせる美しい声を持つ優れた人たちがいる。シュヴァルトコップ（Elisabeth Schwarzkopf）やシュトライヒ（Rita Streich）である。ひるがえって日本を見ると、かつて中山悌一というドイツリートを得意とするバリトン歌手がいたことをご記憶の方も多いことであろう。彼ほどのすぐれたドイツリートを歌うバリトン歌手が現在日本にいるのかどうか、最近のことを私は知らない。

シューベルトは生粋のウィーン人であるのに、その歌曲がドイツリートの代表のように言わ

れているのはなぜであろうか。たしかに、シューベルトはドイツ人であるヒツシュやフィッシャーディースカウ、あるいはシュヴァルツコップ、シュトライヒによって歌われている。代表作「冬の旅」や「美しき水車小屋の乙女」はドイツ人、ミュラー（Wilhelm Müller）の詩によっているし、シューベルトは「野ばら」など、ゲーテの詩を歌にしている。私は、モーツァルト、シュトラウスなどウィーン（オーストリア）音楽と、バッハ、メンデルスゾーンなどのドイツの音楽は性格を異にしていると思うが、ベートーヴェンやブラームスはじめ多くのドイツの作曲家がウィーンで活躍したので、両者の融和から美しいリートが生まれたのかも知れない。何と言ってもウィーンは音楽の都である。

シューベルトの歌曲といえば松高時代の親しかった友、吉田極君を思い出さずにはいられない。先年亡くなったが、その数年前、根矢学君と東京に行ったとき、築地の寿司店で吉田君と会ったのが最後であった。松高時代、私と同じ旅順からの転入生であった吉田君（文乙）と私は音楽部で親しくしており、ともに音楽を楽しんだ。歌、ヴィオラ、指揮、と彼の音楽的才能は抜群で、松高音楽部は吉田極なくしては成り立たなかった。彼の歌うシューベルトの「魔王（Erlkönig）」は絶品で、深みのある、美しい声の響きは今も私の耳に残っている。これも故人となった釣流英明君（文乙）（彼や根矢君と私は三光寮三津浜分寮で一緒であった）が作詞、吉田極君が作曲した松山高等学校七十五周年記念歌「瀬戸の海は」は記念式典で披露され、紺田幹事がテープにいれて頒布したから、多くの同窓生の皆さんはご存じであろう。この曲にも吉田極君の音楽的才能が表われており、この記念歌には寮歌とも異なる、ドイツリートのそしてウィーン的情緒が垣間見られるように私には感じられる。

ヒツシュと比べるのは酷というものであるが、声量のある萬田君がドイツ語と音楽に精進を重ね、詩と音楽の心を理解し、せめて吉田極君の域に早く達するよう期待したい。日本では音楽関係の大学に入学する男子が少ないと聞くから、彼には是非頑張るって欲しいものである。そして、また何時の日にか松高同窓会京阪神支部総会で出席者の魂を揺さぶるような音楽を聴かしてくれることを願うことにしよう。（松山高等学校同窓会京阪神支部会報、平成10年度）

3. 科学一般、外国語

「若い頭脳“流出”を防ごうー本人も幸せにならない」

1. 10年前と同じ顔触れ

いよいよ秋の学会シーズンだが、来月開かれる日本植物学会のプログラムを見て、一つのこと気がついた。私の専攻する植物ホルモンに関係した生理、生化学の分野では、10年前のプログラムとほとんど同じ顔触れが並んでいるのだ。入替わっているのは、共同研究者の若い人たちだけである。ところで、4年ごとに開かれる国際植物ホルモン会議の第6回会議が、さきごろカナダのオタワで開催され、私も招かれて出席した。そのプログラムを、前回あるいは前々回のそれと比べてみると、次の2つの事実に気がつく。1つは、ヨーロッパの学者の参加が減っ